

第24期第15回常任理事会議事録

日時 昭和63年4月5日(火) 13:00~18:00

場所 気象庁観測部会議室

出席者 山元, 関口, 浅井, 河村, 松野, 荒川, 能登,
土屋, 重原, 中村

議事

報告事項

- 1) 第24期14回常任理事会の議事録は一部修正の上確認された。
- 2) 各委員会報告

「庶務」

資料に基づき報告があった。主なものは次の通り。

- (1) 日本流体力学会から「第20回乱流シンポジウム」の協賛依頼
- (2) 「第10回風工学」シンポジウムの開催の案内
- (3) 1988年地球化学研究協会学術賞「三宅賞」の候補者の推薦依頼
- (4) 「第26回粉体に関する討論会」の共催依頼。共催せず
- (5) 第25回理工学における同位元素研究発表会の案内
- (6) 昭和62年度日産学術研究助成金を岩坂泰信(名大水圏研)会員が受領した
- (7) 事務局職員の交代, 加藤寿, 片桐勝男両氏が退職, 新しく伊藤嘉一, 馬場和一両氏が担当

「会計」

2月分の収支状況について報告があった

「天気」

天気3月号目次および4月, 5月号の予定内容が紹介された。アンケートを検討中である。

「気象集誌」

2月号から紙質をかえた。図の映りが良くなる。

「講演企画」

- (1) 柏の大会では, 口頭発表は236件, ポスターセッションは13件の申し込みがあった。ポスターセッションは今後定例の行事とする。
- (2) 大会の各分科会の同時進行状況がよく分かるようにプログラムを工夫する。
- (3) 秋季大会にはテーマをあらかじめ指定して, 公募するスペシャル・セッションを実施したい。

「教育と普及」

- (1) 第22回夏季大学のテーマ「環境としての大気」と日程・内容が示された。「天気」5月号に掲載する予定。

「国際学術交流」

- (1) 63年度前半の研究集会の旅費補助には7名の応募があり, 4名を選んだ。
- (2) 11月に開催される「モンスーン」の国際会議には交流事業として松本会員, 杉会員2名を派遣する。
- (3) 基金の募金について企業関係折衝状況の報告があった。

「総合計画」

- (1) 第14期日本学術会議の会員候補者として当学会から推薦した浅井富雄, 樋口敬二両会員について資格認定の通知を受けた。

「堀内基金奨励賞」

- (1) 3月30日に委員会を行い, 委員長に田中正之会員を選んだ。
- (2) 候補者推薦について「天気」4月号で公募する。
- (3) 6月中に授賞者を決定する。
- (4) 受賞者は一名に限定されているが, 幅の広い分野から候補者を推薦できるように, 候補者を二名にすることについて討論が行われた。全国理事会の話題として意見を聞くこととした。
- (5) 第1回目の選考なので, いろいろ検討してみる。その経過は申し送り事項とする。

審議事項

- (1) 会員の新規加入について
個人会員掛川英男ほか11名の新規加入が承認された。
- (2) 事業報告, 事業計画計画案について
一部修正の上承認された。
- (3) 決算報告及び予算案について
原案通り承認された。
- (4) 「集誌」印刷業者の決定について
昭和63年度の「集誌」の印刷業者は入札の結果, 学術図書が落札し承認された。

なお、今回は66巻3号から6号までとする。
67巻1号からは印刷方式、サイズを変更する予定で検討をさらに進める。

(5) 昭和64年度沖縄大会について

沖縄支部より支部総会において秋季大会を引き受けることが承認されたとの報告があり、開催について本部に支援を求めてきている。常任理事会としてはできる限りの援助をして行くこととする。今後庶務担当理事が沖縄支部との窓口になる。

(6) 藤原賞選考委員会からの提案について

(c) これを学会賞と同じく「原則として1名」にし、異なる分野から複数の候補者を選べるように改正すべきであるという意見については、5月の理事会に諮ることとする。

(b) 応用的、技術的色彩の強い研究を評価するため、学会賞・藤原賞とは別途に技術賞的な

ものを設けてはどうかという提案については、各賞の委員会で討論してもらうことになった。

(7) AGU 総会について

アメリカ地球物理学連合 (AGU) が1990年8月に日本で総会開催を予定しており Eagleson 会長から理事長に対し個人的にジョイントの打診があった。国内の他の学会の動きなどをみて、協力して行くことにする。その旨理事長から返事をするにすることにする。

(8) 委員の交代について

「天気」(旧) 安富裕二 (新) 嶋村 克

「国際学术交流」

幹事 (旧) 二宮洗三 (新) 野瀬純一

辞任 松本誠一

以上承認された。

(P336からのつづき)

(8) 寒冷地における室内空気環境

このうちの(1),(4)については現在、国立公害研究所大気環境計画研究室、分析室等と共同研究を行っており、また、(2)については関東地方公害対策推進本部大気汚染部会および産業界公害防止協会の「2次粒子等汚染子測手法開発」研究グループに参加し共同研究を行っています。

このように当研究所では中部山岳地域に位置しているという特徴を生かし、山岳地域における大気汚染、気象の調査研究を行っていきたくと考えていますが、その際に従来行ってきたような他の研究機関との共同研究は、次のような点で重要かつ有効であると考えています。ひとつは大気汚染、気象現象が当然のことですが広域的な面を有していることであり、もうひとつは、最新の学問的成果、現象の理論的考察あるいは室内実験、数値実験等の分野に優れている国の研究機関、大学等と、現地の状況を良く知っていて、種々の現象を実際に身近で観測する機会に恵まれ、またフィールド観測データを豊富に有している地域の研究機関が協力して共同研究を行うことにより、それぞれの長所が生かされ、相乗的な効果が期待できることです。

このような共同研究の利点を生かした当研究所の研究

成果の一例として、長野県東北部において春～夏季の夕方から夜間にかけてみられる高濃度オキシダント現象(ナイトスモッグ)の発生原因に関する研究があります。通常、オキシダントは窒素酸化物、炭化水素等の一次汚染物質から光化学反応によって生成されるため、発生源地域およびその周辺では日射の多い日中に高くなり、夜間には一酸化窒素との反応等により低下します。これに対し、長野県東北部でみられるナイトスモッグは、このような発生源地域の高濃度オキシダント現象と顕著に異なる幾つの特徴を有しています。当研究所ではこの現象を解明するため1981年から国立公害研究所大気環境計画研究室との共同研究を開始し、1982年には環境庁の委託調査を、また1983年から1986年まで文部省科学研究費環境科学特別研究「内陸域における大気汚染の動態」および「沿岸域から内陸域にいたる広域大気汚染に関する研究」研究班に参加し、広域的な共同観測を行ってきました。これらの共同研究により、長野県東北部で春～夏季にみられるナイトスモッグが種々の局地風の結合によって東京湾地域から中部山岳地域へ長距離輸送された汚染気塊によるものであることが明らかにされ、また、その輸送機構および輸送過程における大気汚染物質の反応過程についてもかなりのことがわかってきました。